

今昔物語集

源博雅朝臣行ニ会坂盲許一語（卷廿四第廿三）

今昔、源博雅朝臣と云ふ人有けり。延喜の御子の兵部卿の親王と申す人の子也。万の事止事无かりける、中にも管絃の道になむ極たりける。琵琶をも微妙に弾けり。笛をも艶えもいはず吹けり。此人村上の御時に□□の殿上人にて有ける。其時に会坂の関に一人の盲庵を造て住け

り。名をば蟬丸とぞ云ける。此れは敦実と申ける式部卿の宮の雑色さふしやになむ有ける。其の宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道に極いみじりける人也。年来琵琶を弾給けるを常に聞て、蟬丸琵琶をなむ微妙に弾く。而る間此の博雅此道を強に好て求けるに、彼の会坂の関の盲琵琶の上手なる由を聞て、彼の琵琶を極きて聞ほま欲く思けれども、盲の家異様なれば不_レ行して、人を以て内々蟬丸に云せけ

る様、『何と不_ニ思懸ぬ_一所には住ぞ。京に来ても住かし』
と。盲此を聞て其答へをば不_レ為して云く、

世中はとてもかくてもすごしてむ

みやもわらやもはてしなければ

と。使返て此由を語ければ、博雅此を聞て極く心にくく
思えて心に思ふ様、我れ強に此道を好むに依て必此盲に
会はむと思ふ心深く、其に盲命有らむ事も計難し、亦

我も命を不_ニ知ら_一、琵琶に流泉啄木と云ふ曲有り、此は
世に絶ぬべき事也、只此の盲のみこそ此を知たるなれ、
構て此が弾を聞かむと思て、夜、彼の会坂の関に行にけ
り。然れども蟬丸其の曲を弾く事无かりければ、其後
三年の間夜々_{よなく}会坂の盲が庵の辺に行て、其曲を今や弾く
今や弾くと、窃に立聞けれども更に不_レ弾りけるに、三
年と云ふ八月の十五日の夜、月少し上陰_{うはぐもり}て風少し打吹た

りけるに、博雅哀れ今夜は興有が、会坂の盲今夜こそ
流泉啄木は弾らめと思て、会坂に行て立聞けるに、盲琵琶
を搔鳴して物哀に思へる気色也。博雅此を極て喜うれく思
て聞く程に、盲独心を遣やりて詠じて云く、

あふさかのせきのあらしのはげしきに

しひてぞるたるよをすごすとて

とて琵琶を鳴すに、博雅これを聞て涙を流して哀れと思

ふ事无限し。盲独言に云く、『哀れ興有る夜かな。若
し我れに非ず□□者や世に有らむ。今夜心得たらむ人の
来こかし、物語せむ』と云を、博雅聞て音を出して、『王
城に有る博雅と云者こそ此に来たれ』と云ければ、盲の
云く、『此く申すは誰にか御座す』と。博雅の云く、『我
は然々の人也。強に此道を好むに依て此の三年此庵の辺
に来つるに、幸に今夜汝に会ぬ』。盲此を聞て喜ぶ。其

時に博雅も喜び乍ら庵の内に入て、互に物語などして博雅、『流泉啄木の手を聞かむ』と云ふ。盲、『故宮は此かくなむ弾給ひし』とて、件の手を博雅に令レ伝てける。博雅琵琶を不レ具りければ、只口伝を以て此を習て返々す喜けり。晝に返にけり。此を思ふに諸の道は只如レ此可レ好き也。其れに近代は実に不レ然。然れば末代には諸道に達者は少き也。実に此れ哀なる事也かし。蟬丸賤しき

者也と云へども。年来宮の弾給ひける琵琶を聞き、此極かくたる上手にて有ける也。其が盲に成にければ会坂には居たる也けり。其より後盲琵琶は世に始る也となむ、語り伝へたるとや。